



9
4084
3



門口9
號4084
卷3



爲 出 矣 縣 門
 有 智 人 者
 究 如 泥 才 筆

びん せん の めん に いづる こと
 ちる あり びん の めん に
 あら せし ちの ちの ちの ちの
 せい ちの ちの ちの ちの



昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈

安東野矢書畫本
卷之三
一
三書房

魚好法海のいふかゝる人の富を執るる處の許申と
 一人のあもよしてさげておと孫晨の冬月に始す海なるてま
 一本ありきと文にこれいぬぬ一胡子をあてめりいさなり
 んのちすいかりえとつれぐまにわかけり珠に清美すと操
 正一泥の酒りの中よりまき花のいささしくほわさるるこ



敵れざる過絶を
 夜て梳篦をたが
 るものとして恥
 ぶ者ハ申す孔子
 もたつと徳あき
 らふ智阿ふほぞ
 女子のごくく多
 財を恥とせん男
 に禮儀とるを
 君はふ要食材
 食ひたまにふの小
 やふ教訓すると
 も清美の天子
 るハ濁れる沈の



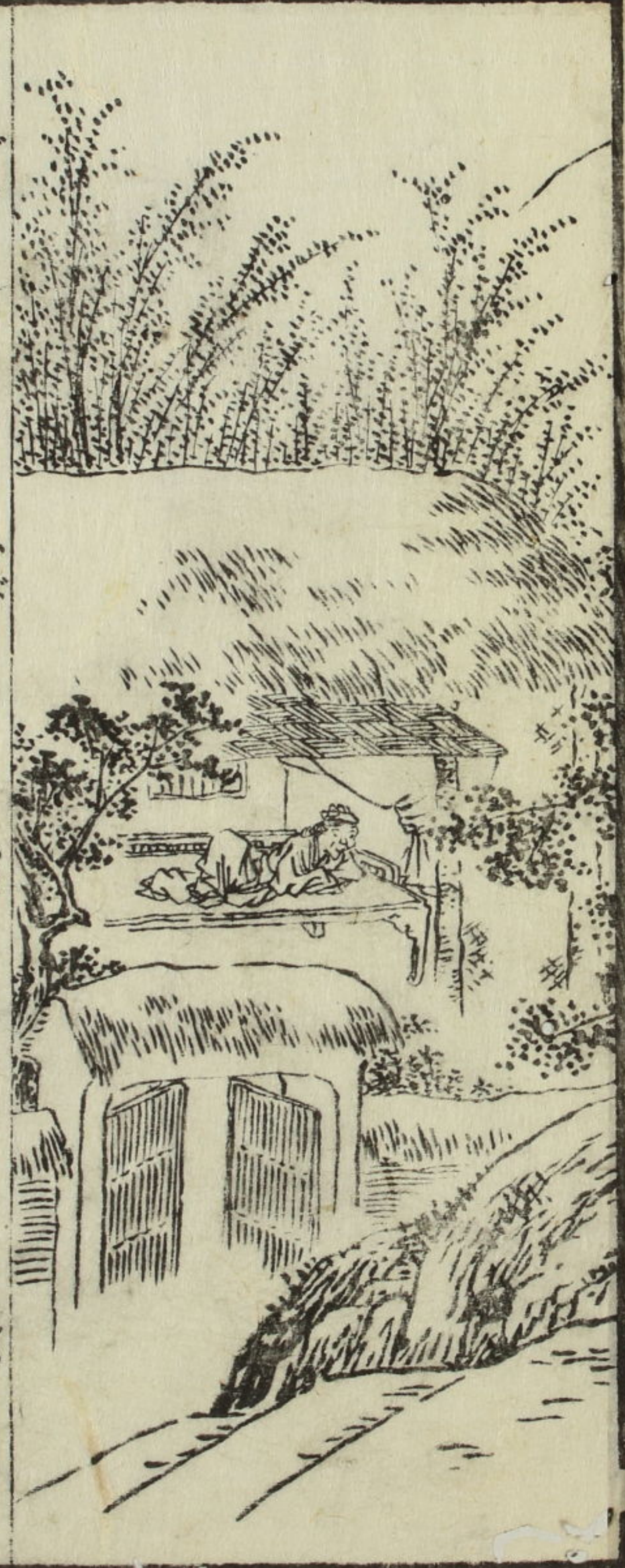
申より蓮花のい
 ちりよ〜ひ〜
 いろ〜り涼〜ん
 周茂耕の筆成
 せ〜も花乃
 及香を〜ふ
 あ〜げ〜揮の
 せ
 せ
 せ
 せ



蓮花のい

周茂耕の筆成

三書房



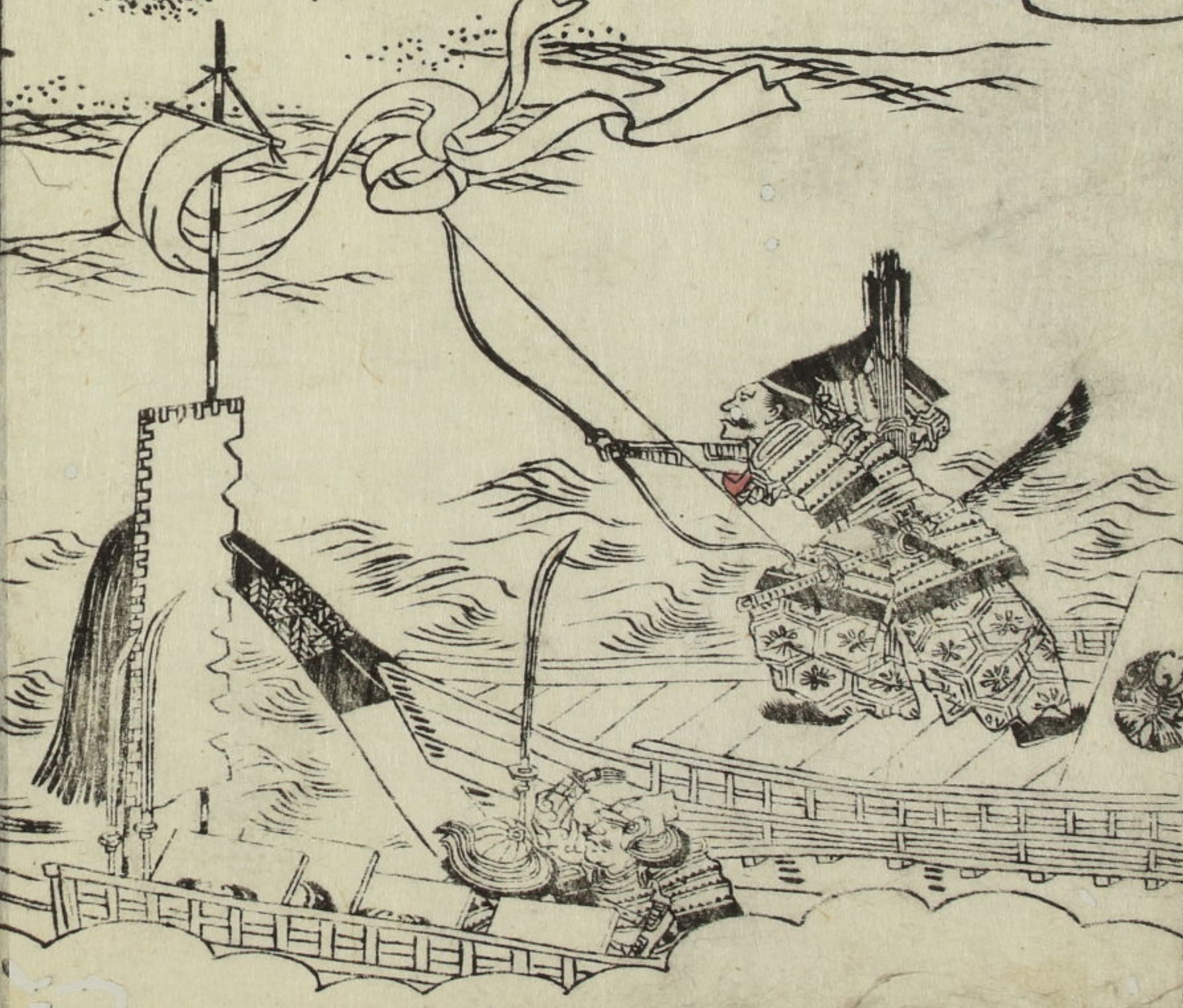
父母如天地

師君如日月

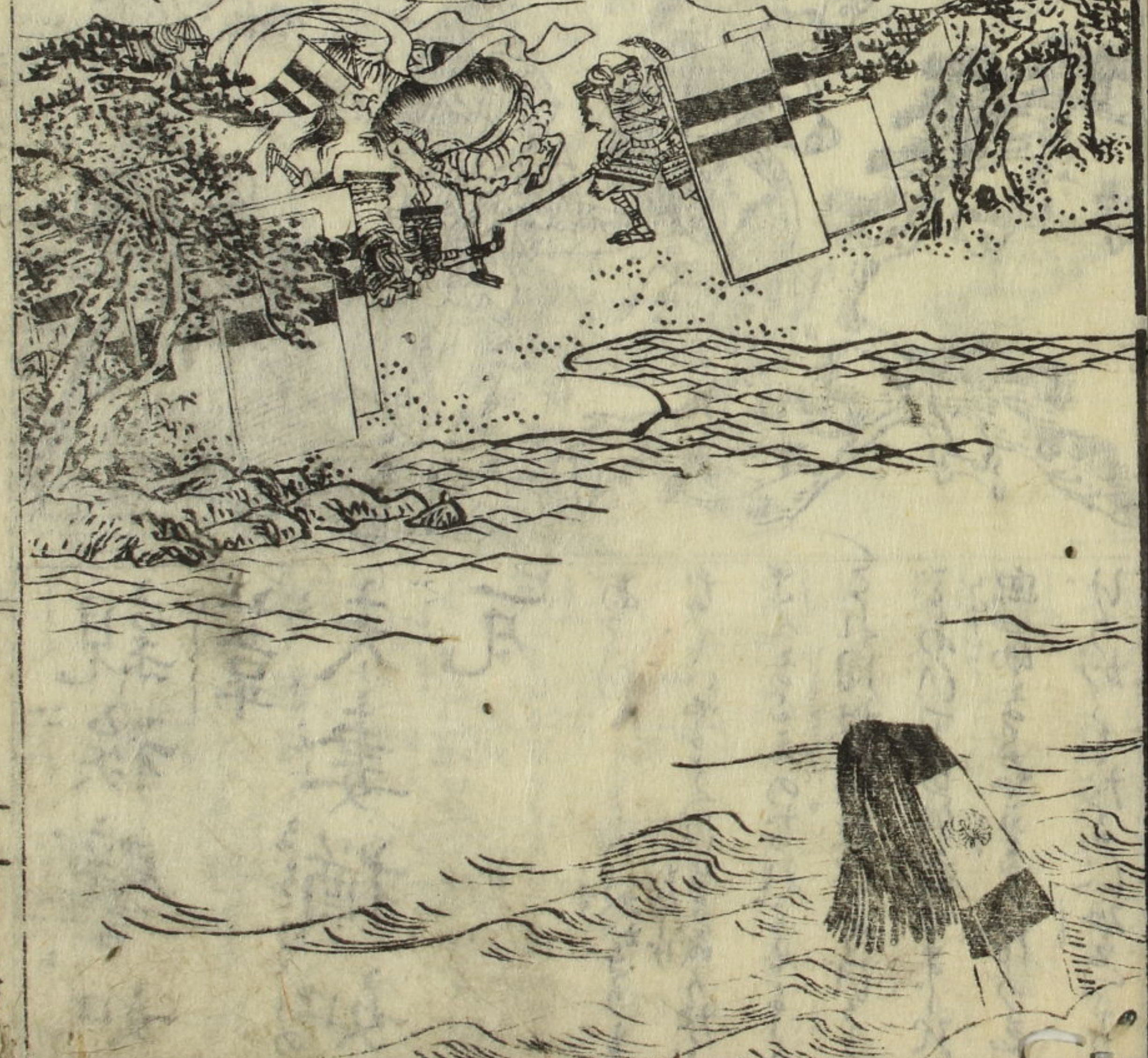
そのまゝ七十二子ハ孔子の墨蹟まゝをそとて三章まゝ師と教ふの礼をつ、
せり誅つゝに父母をそあをせしむる天地の徳にたへ

君ハ師とて万歳をてし日月に比するもむらさき

臣の君を親と敬ふこと
子れ父に事するごとく
すしひととも君臣の別
にて行時も難くも
なく死生存亡をたに
まふも君あれば君は父
よりも尊重しされハ
如人も臣之事は猶子
之事又父子雖至
親猶未若君臣之
肉體也といひ身



體髪皮膚受之又
母不敵毀傷とい
孝子の乃たあれども
君の馬おに遊んで
一旦も逃げ死すとい
さすくするは又これ
臣の乃た死すべしと
死せしめて父をもふ
義に臨むを實に
石不孝のゆひ
つゝあり



言部言部言部 卷之三 三書房



親族譬言如
 草
 夫妻猶如
 瓦

あゝ... 親族の譬言も
 なく... 草の如く
 さるる... のなれども
 これ根柢姓にあじう
 ちあひて生に離るまじ
 血筋も... の柢も
 けりか... たまに...



夫の親族に... 夫は
 親... 親族に... 夫は
 皆先回宛生死とも
 に... 夫は
 元回柢にあ... 夫は
 てあ... 夫は
 一... 夫は
 の別を... 夫は
 玉と... 夫は
 さや... 夫は
 別... 夫は
 ちせり



世の請に老をた親族よりちちの東家といひても親は泣きよりと命を盛
 の時ハ親族一家のはうひにあはれれば何事も落着せぬ故人も夫
 妻ハおれのごとく親屬ハおれのおとこりむづあはれは九族
 としよにわたりて父母の血肉をもちちちの命をたればおれは
 ろびあはれおれはあはれにまむ親に死のにあればかりに
 なはれおれはあはれにまむ親の死のにあればかりに

故人の語に男女議
 親不可負其閑閑
 之高資産之厚苟
 人物不相當則子女
 終必抱恨况又不和
 而生他事者予とい
 つる今の人だ富者
 乃女を嫁せし
 めんことを好む男
 りも富人の女を
 人と欲すれども人



おあーくろきれ
 ハ夫婦の中むす
 うびまに恨を食
 不和して終に他
 事の禍ひを生じ
 お難々の大牛に
 及の是を夫まを
 瓦の破れ碎けや
 すうしてあちも再び
 浦よびんあちも
 めくがせり



寶詩歌書

卷之三

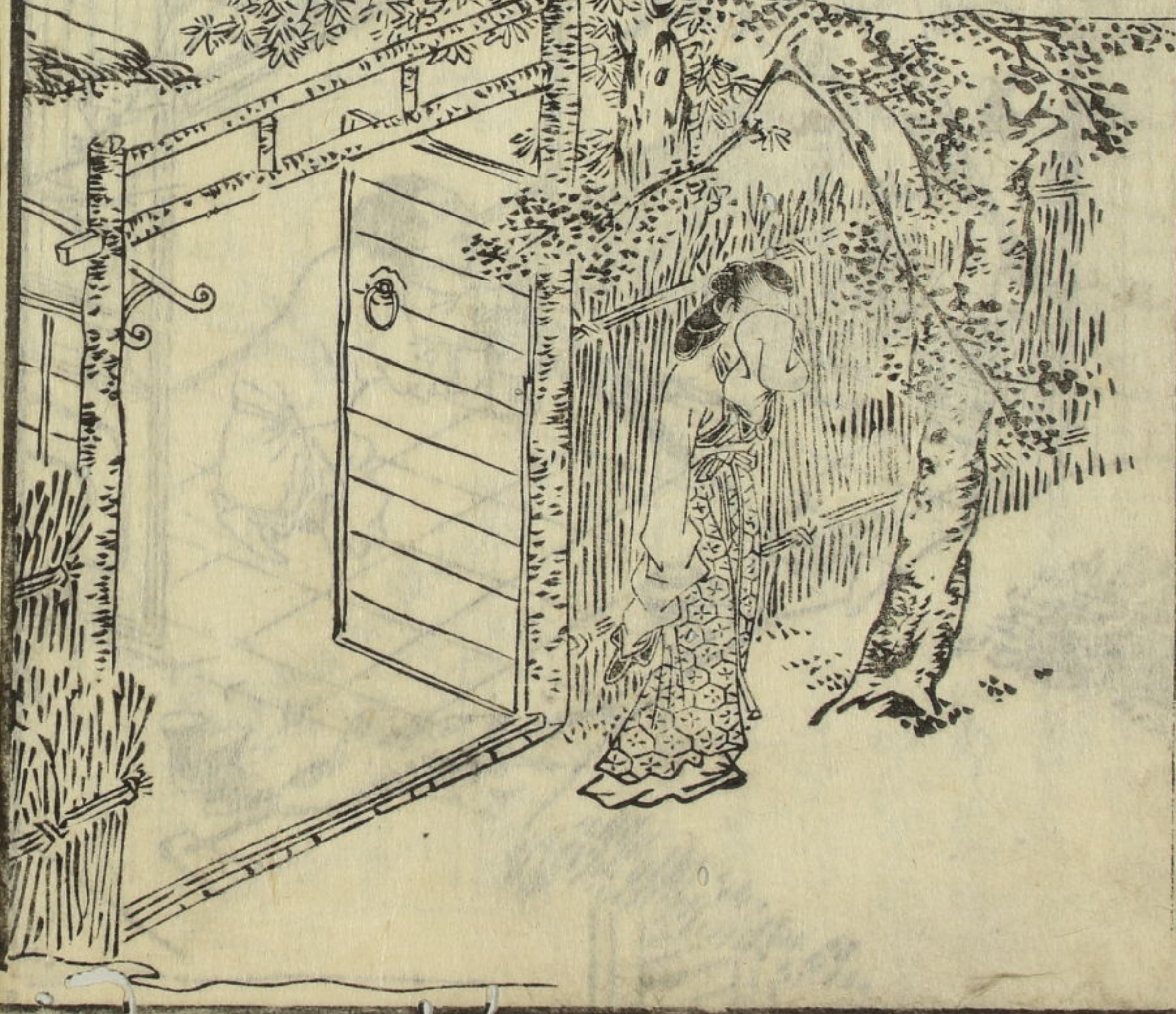
七三

父母孝胡夕

父母の子を愛し一むをたる事至るも一
 原末なき親にして孝を以てして
 事なむに世人不孝此は多く孝りの者ハ少
 とて何のさうならんや只身をさくを
 して何のいと防を家業に精を出し
 是バ父母を去んすうらむのみ強
 うとせむハ孝行ハおきぬしりあ
 をやすくあやたしとせむとて孝
 りて人を替へ人申す恥をかたがに
 水の中此解つ



継父継母に事て孝を
 祈ふはまご別のめ法あるべ
 一 天性の親子にあつた
 きバ父母のうごふも慈愛
 すくまゝ一板にれと養と
 教とを併して孝行を継
 立べ一 継父継母をこら
 ん子の心はあつたなり
 無罪言ふぬ父母ハ親ハ
 りらても珍まらざること
 ぼりしつゆくらふた
 へかかす一 関子書が
 継母もさむらうとて
 重縁をせせ堂服

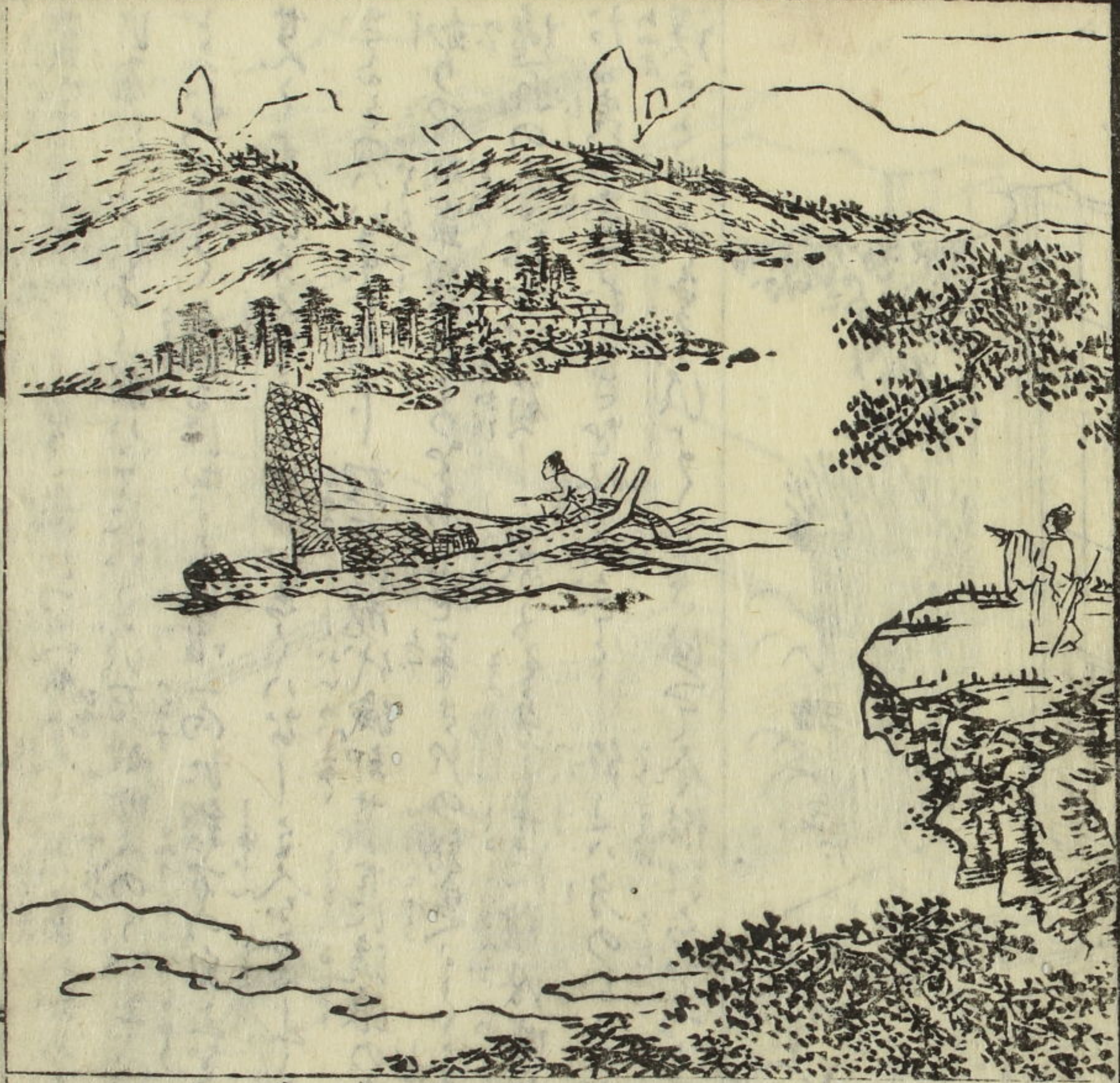


かりふくし合傷さす
 慈母まふ末世の今と
 孝子といはれはド
 すまや無行を言ふ
 ぞありがやふ前まや
 これ天より家に孝子
 の名をさぐけまふ
 なりし力まの孝行
 をなれべ一 終ふ親
 子れ中おあつたご生の
 父母に何のちがひもこれ
 あつんまらや娘のより
 ませりの





師君仕晝
夜
申すてまに仕るハ
親に孝行を盡すリ
わむり死する
り嘆おびり君は
ハ義をりて相合
君の母のぞくはハ水
のぞく水も船をり
とも亦おれおれを
覆ひるありと故人
もり死と恐れば

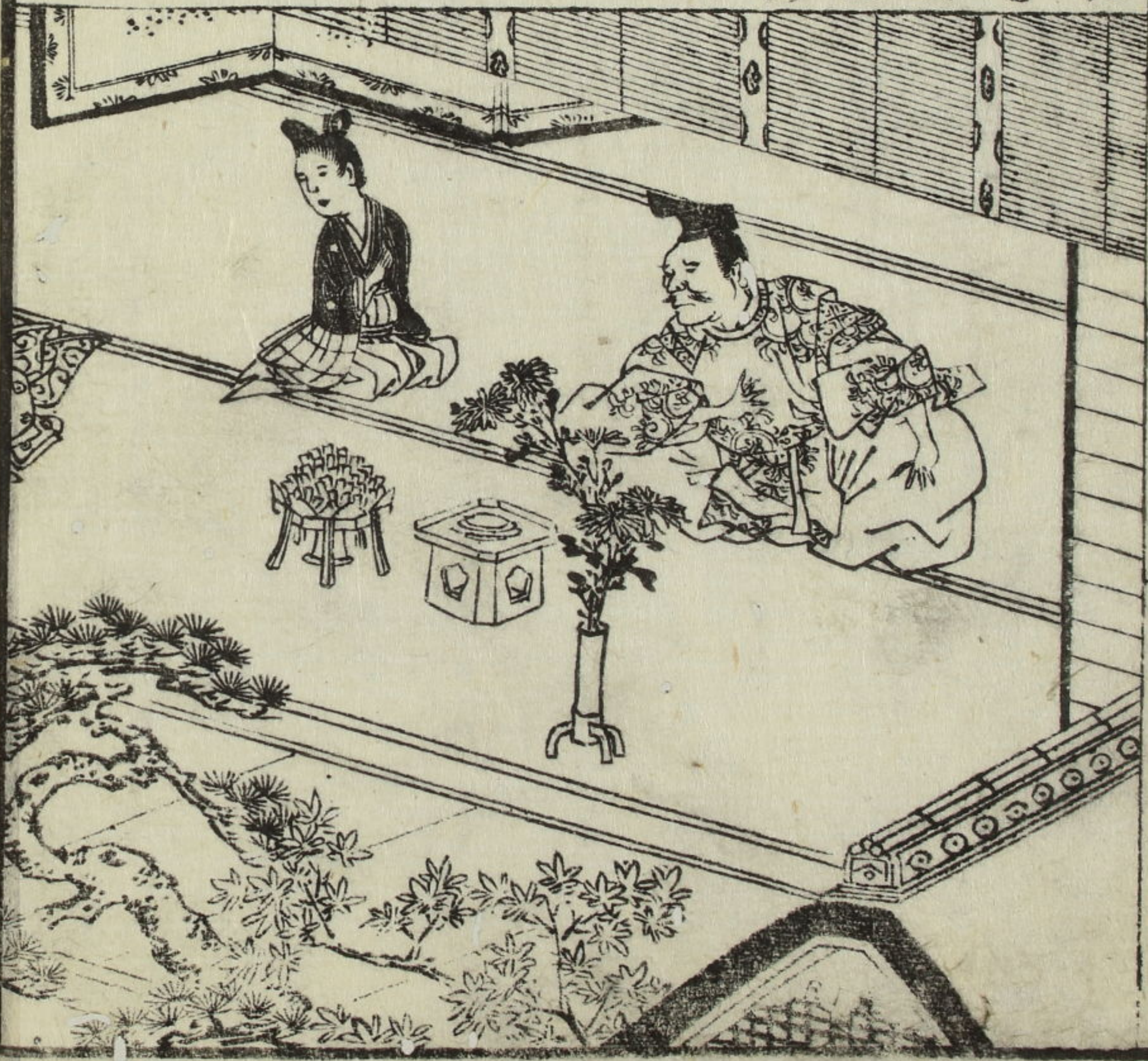


して直諫する
る時ハ君ハ非
業多に似たり君の
んにそむけし
はくも聚斂の
ちりいいたびも
親見してやれ
親方ハいふ
あて去るも
の及るりしや
にけるやりに
あつ

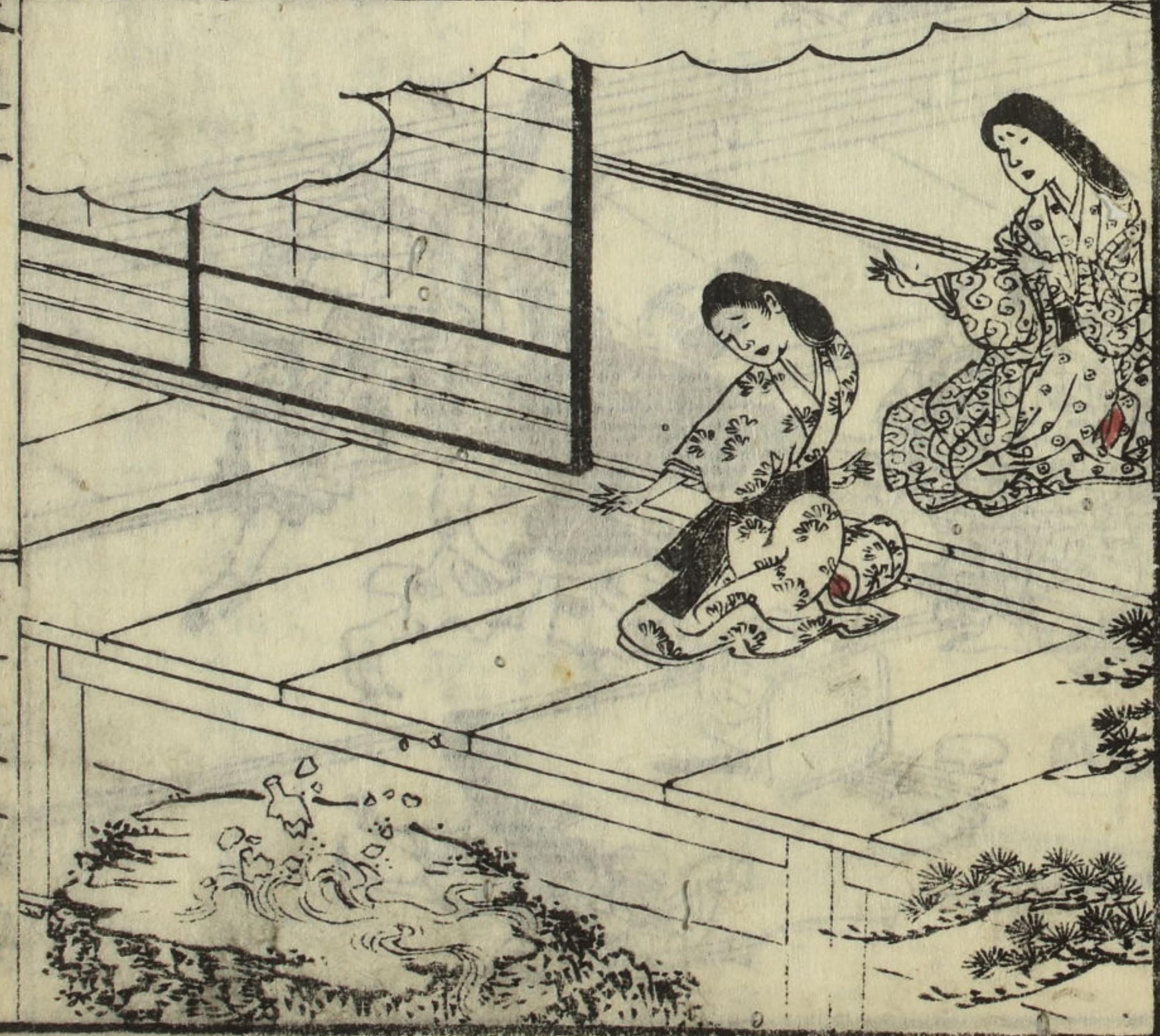
貴人官のやんごころを家につくめ人々のおもしろいおろなる見物の後、
 けいけいごころにあつたにたいして百姓の人のくまをいふは忠義なん
 どいふくくろなるにおもひ唯一向に親方の血上を持てかひのちに
 せんくすもひふんをゆるにきくハナシ人をもあつてまゐる人のため
 せよそのハいすあつた親方の血代誠却せハきに流浪のふかき人ハ誰も
 知りつ朋輩同士ころをあるせよその勅令する人の用はあつた
 道人の命をい願ふもあつたに難儀迷惑するハ中に生ト
 たる貴のおすむることをかきかき終ハいのおろなるなく生涯
 誤るものおろなるびよころはつて令儀にやとつすべし



まことに忠義を以てし若に
も幸し不幸ありき昔も
長者ありまはれを承りて
りて後事を要せり先
妻の腹に生れし男を
王後まもるもあはれが
兄を失ひて弟に代つ
たを密に医家にい
りて一帖の毒系を酒
に和りて九月九日重陽
の賀宴の酒に早し先
妻の手に飲しんとは
かるにま双を侍女
の謀計とさして寤寐に



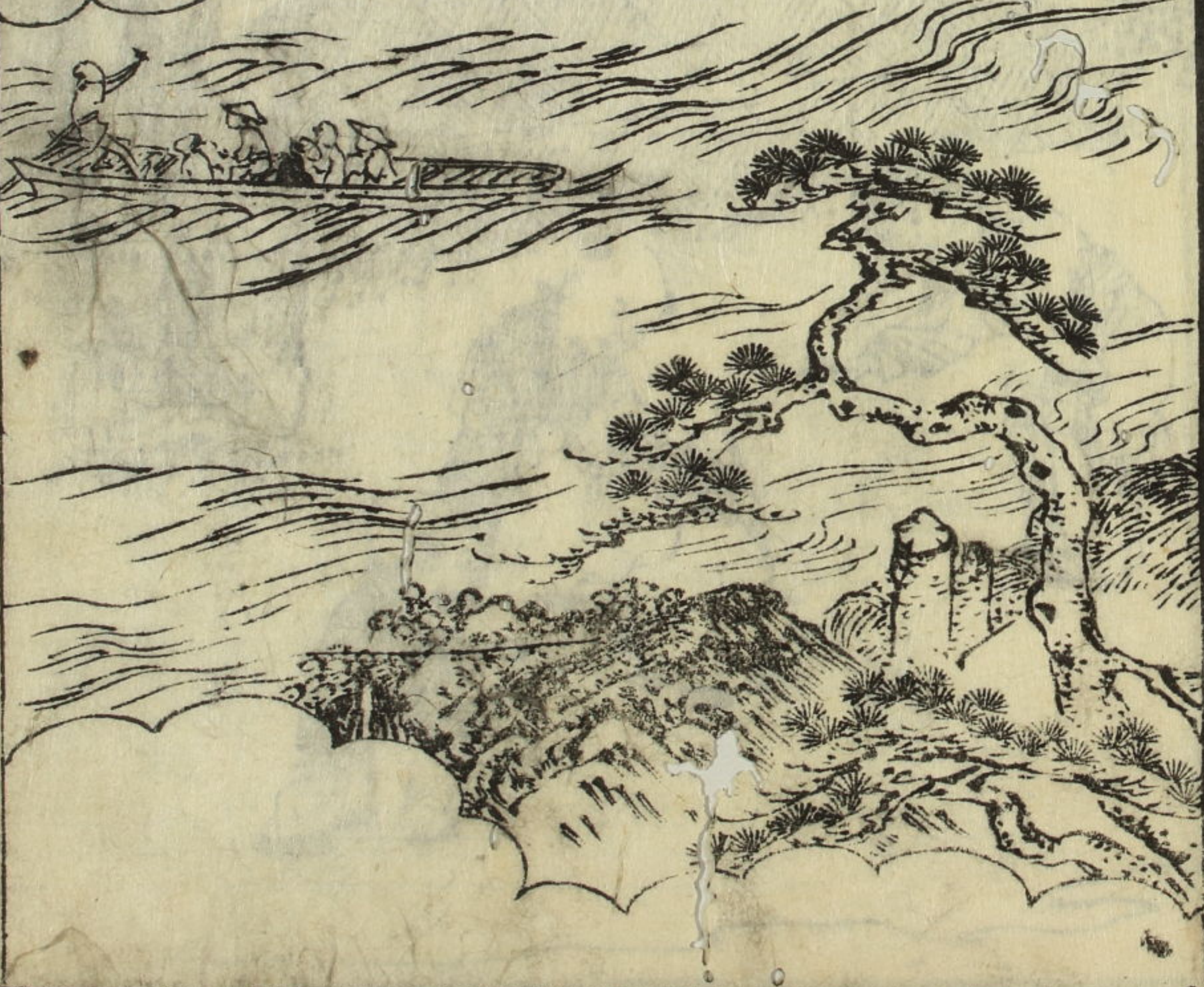
おまへくおすんはいません
毒酒を知りて幸と君のまを
害すは向地にも人に若き
娘て女君に罪せしれどもん
そもまふ不ある西冷花
とあ身に負んこはとてま
解にむり砂とてまを板
毒酒の入る池子をおを
の毒に投付てお解を
つとまをて大に怒り
乱んの西なるりてそら時
にを遊出おは侍女
んに世を渡りて知る人
天地外めのみく知せりえ



むくはらふと見せし
人懐ひてなごめし
舟黄令二あを拾ひ
とりあをもちら見え
にあらん世に母を
とめて川をせり
船川中にいりて
彼子拾ひし
あの人をせり
ち水中に投入れ
涙を流して
いふ日は見せし
れをすすもを
とらふもいふ



ひろいてころの中
に見まくはまひら
して身をぬえ
と見せし
崩せり涙に
ふらん不祥のもの
あり世に金銀を
胞の兄と忌の親
あはれ
たれ



龍傳小仲尼此室
純莊子か智ハ
夢に

あまび夢

松よくそを樹

夕より夢八目に白いてハ

夢をさむけて松を樹

夢人の家さりの暗は

実法友重本巻之三終

あまび本石にも及ぶ



